

「Anorexia Nervosa」に関する臨床心理学的一考察

廣 澤 愛 子
(教育臨床学講座)

A Study on 'Anorexia Nervosa' From a viewpoint of Clinical Psychology

Aiko HIROSAWA

(Department of Clinical, Psychological and Practical Studies in Education, Aichi University of Education)

要約 今日, Anorexia nervosa (神経性食欲不振症) に関する研究は, 臨床心理学の領域においてのみならず, 精神医学や心身医学などの領域においてもさかに行われている。本論文では, Anorexia nervosa (神経性食欲不振症) の背景要因とその治療プロセスについて「女性性」の観点から臨床心理学的に考察し, Anorexia nervosa (神経性食欲不振症) においては, 元来, 源を一にしていた女性性の二つの側面が切り離された状態を呈しており, その両者が新たな形で再び結びつくことが治療のプロセスとして必要不可欠であると結論づけた。そして, 切り離された女性性の二側面が再び結びつく様相について, 神話のモチーフを援用し, 試論を展開した。

また, 本論文では, Anorexia nervosa (神経性食欲不振症) が時代の影響を強く受けた疾患であることや女性に多く見られる疾患であることを考慮し, Anorexia nervosa (神経性食欲不振症) の発症とその治療過程を, 現代女性に課せられたイニシエーションとパラレルであると想定し, 常に, 現代女性のイニシエーションという視点から理解する試みを行った。

keywords : Anorexia nervosa (神経性食欲不振症), 女性性の二側面, 現代女性のイニシエーション

1. はじめに

今日, Anorexia nervosa (神経性食欲不振症) を含めた摂食障害に関する研究は, 臨床心理学の領域においてのみならず, 精神医学や心身医学などの領域においても, さまざまな観点からさかに行われ, 多くの研究者たちの関心を引いている。また, 摂食障害が女性に多い疾患であり, 現代社会において増えつつあることに注目し, 社会文化的背景を考慮した女性学からの研究もある(浅野, 1996など)。さまざまな角度からAnorexia nervosa (神経性食欲不振症) の研究が行われているという事実は, この疾患の多様性を示唆しており, さらに, Anorexia nervosa (神経性食欲不振症) の診断基準がDSM-ⅢからDSM-ⅢR, DSM-Ⅳ、へと至る間に改変が見られることから, 時代の流れとともにこの疾患のあり方が流動していることを裏付けている。中村(1997)によると, 現在, 精神医学や臨床心理学の領域においては, Anorexia nervosa (神経性食欲不振症) は単一の疾患としてではなく症候群として捉えることが一般的であり, 「食思不振症, 過食症は病因的にも症状的にも単一ではなく, 異種類のものが集まった複雑な障害である」(Emmett, 1985) と言う。こういったAnorexia nervosa (神経性食欲不振症) の多様性を踏まえたいうで, 本論において, Anorexia nervosa (神経性食欲不振症) を具体的に

のような視点から臨床心理学的に考察するかについて, 諸家の見解を踏まえつつ, 以下に述べる。

斎藤(2000)は, Anorexia nervosa (神経性食欲不振症) を含めた摂食障害について, 「摂食障害は決して特殊な病的な人にだけ生じる異常な現象ではなく, ある状況下では人間の誰にでも生じうる普遍的な現象である」と述べている。そして, 人が人生において行き詰まり, 魂の喪失の危機がもたらされたときに, その事態を救うために拒食症という症状が引き起こされるという。斎藤(2000)は, 主としてユング心理学の知見に基づいてAnorexia nervosa (神経性食欲不振症) をこのように捉え, このプロセスを, 「病的に見える過程であると同時に救済と変容の過程であり, 一種の儀式的進行の過程である」と言い, それを「イニシエーション」と結論付けている。この疾患が誰にでも生じうる普遍的な現象であるかどうかまでは分からないにせよ, これを個人のイニシエーションと捉える見方は, 筆者の少ない臨床経験に照らしてみても首肯できるところである。又このことに加えて, 上述したように, Anorexia nervosa (神経性食欲不振症) が時代の影響を受けた疾患であり, 女性によく見られることを考慮すると, この疾患を現代社会における女性のイニシエーションという視点から捉えることもできるであろう。実際, Woodman(1985)やShorter

(1983), Spignesi (1983) からも豊富な臨床経験に基づいて、それぞれユニークな観点から示唆に富む見解を示しつつも、その根底には、この疾患を現代女性のイニシエーション（但し、西洋社会における）と絡めて考察する姿勢が貫かれている。彼女たちが指摘する現代女性のイニシエーションとはどのようなものであろうか。Woodman (1980) や Shorter (1983), さらに彼女たちと同様の観点から現代女性のイニシエーションについて述べている Perera (1983) の言葉をもとにその概略を示すと、次のようになる。

まず、現代は父権制の時代であり、そこで生きている現代女性は「父の娘」と呼ばれるという。彼女たちは、与えられた父権的な価値観をそのまま生きることのできる良いペルソナを保ってきたが、一方で、本来女性たちが持っていたはずの豊かな女性性の本能やエネルギーを拒み、それらを犠牲にしてきたという。したがって、女性性の根源と精神を回復させるためには、父権制のもとでの精神的な娘としてのアイデンティティを捨てて、女神の精神の内へと下降し、女性性の力と熱情を取り戻すことが必要であり、これが、現代女性に課せられたイニシエーションであるという。つまり、「父の娘」たちは父権的な価値観によって傷つけられており、その傷の癒しは、本来女性たちが有していたはずの「女性性の根源と精神」から生じるというのである。そして、Anorexia nervosa（神経性食欲不振症）の背景にも、このような現代女性のイニシエーションが託されており、Anorexia nervosa（神経性食欲不振症）の治癒過程には、父権的価値観による傷つきを実感し、女性性の力と熱情を取り戻すことでそれを癒していくことが必要不可欠であると考えられている。

したがって、本論においても、こういった見解を踏まえて、Anorexia nervosa（神経性食欲不振症）には現代社会における女性のイニシエーションが託されている、と考えたいと思う。そして、Anorexia nervosa（神経性食欲不振症）が引き起こされる背景要因として最もよく指摘される「母娘関係の歪み」を端緒にして、Anorexia nervosa（神経性食欲不振症）の女性及び「父の娘」と呼ばれる現代女性が抱えている問題とそれへの取り組みについて、「女性性」の視点から考察したいと思う。

具体的な論文構成としては、まず、①Anorexia nervosa（神経性食欲不振症）の背景要因としてこれまで最もよく指摘されてきた「母娘関係の歪み」に関する諸研究に触れた後、Anorexia nervosa（神経性食欲不振症）の女性たちが語る母親のイメージを「厳しく容赦のない母親」と定義する。そして次に、②この「厳しく容赦のない母親」を通して、Anorexia nervosa（神経性食欲不振症）の女性たちのところに内在化された「厳しさや容赦のなさ」が、Woodman (1980) や Shorter (1983) らによって、これまで否定

的な男性（否定的アニムス）という視点から捉えられてきたことを踏まえた上で、③否定的な男性（否定的アニムス）によるものと考えられてきたAnorexia nervosa（神経性食欲不振症）の女性たちのところに内在化された「厳しさや容赦のなさ」とは、実は女性性に纏わるものなのではないか、という仮説を提言する。Anorexia nervosa（神経性食欲不振症）とは、彼女たちがダイエットなどを通して拒絶しようとする「女性としての成熟した身体」という女性性の一側面と、彼女たちがダイエットをすることでその身体を傷つける際に見せる「厳しさや容赦のなさ」という女性性に纏わるもう一つの側面が対峙している状態であり、これらは、本来は源を一にしていたにもかかわらず、現在は二つの側面に引き離された状態にある。したがって、Anorexia nervosa（神経性食欲不振症）の治癒過程では、その二側面が今後新たな形で結びついていくことが必要であり、それは同時に現代女性のイニシエーションとパラレルではないか、という筆者の試論を述べる。最後に、④一旦引き離された女性性の二側面が再びどのように結びついていくのか、そのプロセスについて考えるために、ギリシャ神話のデーメーテルとペルセポネーの物語を参考にして、物語の流れから、両者が結びついていくプロセスを検討する。

ところで、本論では、Anorexia nervosa（神経性食欲不振症）に関する臨床心理学的な考察を行う際、ユング心理学の知見をベースにしつつ、適宜神話のモチーフを援用したいと思う。臨床心理学的研究において、神話を用いることについてひとこと前置きを述べると、Jung (1936) は、人間には個人的な性質を帯びた意識的・無意識的なところの部分以外に、集合的・非個人的で普遍的な心の領域があると言い、これを「集合的無意識」と呼ぶ。この集合的無意識は、夢や精神病者の妄想などを通して様々なイメージを送り込むが、Jung (1936) は、その内容が神話や昔話と極めて近いものであることに気付いて、神話学や宗教的儀礼についての研究を重ねたのである。したがって神話には、人々のところに大きく影響を及ぼしている集合的・元型的なイメージがあふれており、その中に登場するひとや語られるエピソード、物語の流れからは、ある時代が集合的に抱えている病や人々のこのころのあり方、そしてそれを癒してゆく方向性などについて多くの示唆が得られるのである。

Anorexia nervosa（神経性食欲不振症）に関する臨床心理学的研究において、現代女性のイニシエーションという集合的な視点から考察する試みは、どちらかといえば少数であるだろうし、このような観点からの論述は、臨床的な有効性は低いかもしれない。しかし、Anorexia nervosa（神経性食欲不振症）が時代の影響を強く受ける疾患であると考えられるならば、このような観点からの臨床心理学的考察の試みは、現代を生きる

人が抱える問題や現代社会の病理について考えることに繋がると思われる。また、このような集約的な観点からの考察も、個々の臨床事例に携わるときに、個人の病の背景にある時代の病を意識することで、事例に対する見方が相対化されたり、より多様な見方が可能になったりするであろう。

最後に、Anorexia nervosa（神経性食欲不振症）の診断名についてだが、Anorexia nervosaは、神経性食思不振症や神経性無食欲症などと呼ばれることもある。また一般的に、Anorexia nervosaでは、こういった拒食症状に過食症状が伴い、その両者が反復的に繰り返され、これをひっくるめて摂食障害と呼ぶ。DSM-IV（精神疾患の診断・統計マニュアル）にも、摂食障害の項目には神経性無食欲症と神経性大食症の二つの名称が記載されている。しかし本論では、煩雑さを避けるためにもAnorexia nervosaという原語をそのまま用い、その邦訳として最もよく用いられ、また一般的な表現であると感じられる「神経性食欲不振症」という名称を括弧の中に付することで統一した。

2. 「母娘関係の歪み」について

中村（1997）や田多（1992）も指摘しているように、Anorexia nervosa（神経性食欲不振症）の背景要因として、母娘関係の歪みを指摘する声は多い。Woodman（1980）も「女性が摂食障害にとりつかれている場合、父親コンプレックスよりもっと重大なものは、母親コンプレックスであろう」と述べている。また、Anorexia nervosa（神経性食欲不振症）の研究者として有名なBruch（1978）は、Anorexia nervosa（神経性食欲不振症）の患者の根底に、身体感覚認知の歪みなどいくつかの特徴を指摘しているが、そういった問題が引き起こされる背景には、母親の不適切な養育があると述べている。Orbach（1978, 1990）によると、母親が娘の依存と自立をめぐる欲求をうまく受け入れることができず、娘が基本的な信頼感を得られないことが、Anorexia nervosa（神経性食欲不振症）を引き起こす背景にあると言う。そして下坂（1983, 1988）は、娘が大人の女性へと成長していく過程において母親が良い導き手となれず、その結果、女性として性的に成熟した身体を拒否することに繋がっていくと述べている。Shorter（1983）も、「食思不振症にかかっている女性は、自分の生みの母、さらには自分が母親になること、マザーリングに抵抗する。…（中略）…肉体的な面において、母性の拒絶は明らかである。彼女は、身体をやせ衰えさせ、無月経となり、いかなる女性らしい外形の痕跡をも抹消しようとする」と述べている。

これらの見解からは、母娘関係の歪みはAnorexia nervosa（神経性食欲不振症）の女性によく見られる現象だと言えそうであり、確かに筆者の臨床経験にお

いても、Anorexia nervosa（神経性食欲不振症）の女性は母親との関係に葛藤を抱く人が多く、母親に対して否定的なイメージを抱いている印象がある。そしてそのことが、自らが女性として性的に成熟した身体になっていくことを拒否することにも繋がっているようである。但しこれは、Anorexia nervosa（神経性食欲不振症）の女性の母親が実際に否定的であるというよりも、彼女たちが認知している母親が否定的である、と考えたほうが良いように思う。中村（1997）も、「母親の人格特性と神経性食欲不振症の発症との短絡的な関係づけには慎重でありたい」と述べている。実際の母娘関係における問題を排除するつもりはないが、個人としての母親のみを問題視するよりは、より集約的な母親イメージをAnorexia nervosa（神経性食欲不振症）の女性たちが否定的なものとして捉えていると考えたほうが適切と感じられるし、また実際、母娘関係の歪みのみならず、その他の多くの要素が絡み合っただけでAnorexia nervosa（神経性食欲不振症）が引き起こされているケースが多いように思われる。

しかしいずれにせよ、Anorexia nervosa（神経性食欲不振症）の女性たちによって「語られる母親」が否定的なものであるということは言えそうである。Woodman（1980）のAnorexia nervosa（神経性食欲不振症）に関する調査研究によると、Anorexia nervosa（神経性食欲不振症）の女性の多くが、自身が抱く母親のイメージとして、「厳格さ」や「容赦のなさ」、「怒りのすさまじさ」などを挙げている。つまり、Anorexia nervosa（神経性食欲不振症）の女性たちにとって、「厳格さ」や「容赦のなさ」、「怒りのすさまじさ」は、母親のイメージとして比較的共通したものだと言えるだろう。したがって本論では、Woodman（1980）の調査結果を参考にして、Anorexia nervosa（神経性食欲不振症）の女性が語る母親の特徴を、より一般的な言葉で簡潔に、「厳しく、容赦のない母親」と表現したい。そして次節では、この「厳しく、容赦のない母親」について、さらに、このような母親を通してAnorexia nervosa（神経性食欲不振症）の女性たちのところに内在化された「厳しさと容赦のなさ」について考察したい。

3. 「厳しく容赦のない母親」と否定的アニムス

Woodman（1980）によると、Anorexia nervosa（神経性食欲不振症）の女性たちは、「厳しく容赦のない」母親との原初的關係において、母親から安定感を与えられなかったために、怯えた自我は自らの本能的欲求を表現することが出来ず、その代わりに、攻撃性と防衛機制でなんとか身を保っているという。そして、母親の「厳格さ」は父親の完全主義的な基準と一緒にあって、彼女たちの本能的欲求や感情を徹底的に押さえつけてきたのであり、母親の徹底的な厳格さは父親

の完全主義性という一種の否定的アニムスと渾然一体となっていると述べている。Woodman (1980)をはじめShorter (1983)らも、母親の「厳しさと容赦のなさ」を否定的アニムスと混同し、それと同一と捉える傾向があるように感じられる。そして、母親の「厳しさと容赦のなさ」は、Anorexia nervosa (神経性食欲不振症)の女性たちのところに受け継がれ、内在化されると考えられているようである。ちなみに、アニムスとはユング心理学における用語で、女性の間にある男性的側面であり、ロゴスの原理を司ると言われるが、アニムスとの同一化は、「女性を硬化させ自説を曲げぬ議論好きに仕立て上げる。」(桑原・山口, 1987)と指摘されている。

Shorter (1983)は、母親を通してAnorexia nervosa (神経性食欲不振症)の女性たちのところに内在化された否定的なアニムスの影響について、「パーソナリティ統制をアニムスが侵害している」と言い、彼女たちのすさまじいダイエットにも、母親を通して内在化された「厳しく容赦のないところ」が感じられると指摘している。Woodman (1980)も、「すさまじい意志の力によるダイエットは男性的な道である」と言い、そこにはやはり否定的なアニムスの影響力が指摘されている。筆者の臨床経験においても、あるAnorexia nervosa (神経性食欲不振症)の女性は、「～しなければならない、～すべきである、という価値観の中でずっと生きてきた。もうウンザリである」と語りながらも、強迫的に「痩せなければならない」と体重減少を図り、そのやり方には、「厳しさと容赦のなさ」がひしひしと感じられた。

しかし、Anorexia nervosa (神経性食欲不振症)の女性たちのところに内在化された「厳しさと容赦のなさ」は、本当に、否定的なアニムスによるものとしてのみ捉えることができるのだろうか。確かに、彼女たちのダイエットやその他の言動からは「厳しさと容赦のなさ」が感じられる。しかし、それを否定的なアニムスと混同し、その視点からのみ捉えてもよいのだろうか。結論を先に述べると、筆者はそう考えていない。なぜなら、この否定的アニムスという、いわば男性的なイメージの背後には、極めて女性的な存在があるという臨床的根拠が得られているからである。つまり、心理療法の中で、Anorexia nervosa (神経性食欲不振症)の女性の幾人かは、「もっと痩せて身軽にならないと私に迫るのは、なにか女性のような存在である」(傍点筆者)と語っているのである。もちろんここでいう「女性のような存在」というのは、実在する人ではなく、彼女たちが感じている、目には見えないイメージや、また、夢の中に登場してくる女性像などを指している。しかしそれにしても、この事実をどのように捉え、考えたらよいのであろうか。彼女たちが「女性のような存在」と語ったことから明ら

かなように、彼女たちのダイエットの様子などから感じられる「厳しさと容赦のなさ」には、「女性性に纏わる何か」が込められているのではないだろうか。つまり、従来、否定的な男性(アニムス)の視点から捉えられてきたものの中には、生かされるべき「女性性に纏わる何か」が含まれているのではないだろうか。この「厳しさと容赦のなさ」こそ、Perera (1983)たちが、現代女性が取り戻さなければならないところである、と指摘する「女性性の力と熱情」の一部にも通ずるように筆者は感じている。

4. 女性性に纏わる何か—引き裂かれた女性性の二側面—

Anorexia nervosa (神経性食欲不振症)の女性たちの言によると、体重を落とすようにと迫る「女性のような存在」は、「もっと身軽になるように」と彼女たちを促し、彼女たちが痩せて身軽になると、さらに、「もっと痩せてもっと身軽になって、もっと高いところまで上るように」と促し、その要求は際限がなく「徹底的」に続くという。また、あるAnorexia nervosa (神経性食欲不振症)の女性は、道端で毛がボロボロのノラ猫を見たときに、「たとえあんな風にボロボロになっても、自分の足で自由に生きることができたら…と思った」と語ったことがあったが、この言葉は、筆者にとって大変印象的であった。つまり、双方とも、身を削ることで(あるいは、身を削ってでも)、身軽に自由になることを求めていると言える。Spignesi (1983)は、Anorexia nervosa (神経性食欲不振症)を、女性が食物、身体、生殖という物質的世界に伝統的に縛られてきたことへの反旗のしるしであり、それは、フェミニズム運動などとも符合するが、女性が男性と社会的に平等になったり、男性の真似をしたり、女性を高みにあるすばらしいものであると定義したりすることにはあまり意味がないと述べている。このことをもう少し一般的に述べると、女性にとって本当に必要なのは、働く女性であるとか子どもを育てる母親であるとか夫に対する妻であるとかいう「規定」を外れた一人の個としての存在が認められることではないか、と言うことが出来るだろう。そして、「もっと痩せて身軽になるように」とメッセージを送るのが「なにか女性のような存在」であることから、徹底的に体重を落とすという「身体を傷つける」方法の是非はともかくとして、そこには、何かいつも規定され束縛され続けてきたことに対する「怒り」が表現されているのであり、自由でいたいという主張が込められているのではないだろうか。つまり、「女性性に纏わる何か」が、Anorexia nervosa (神経性食欲不振症)という身体を傷つけるやり方で、それを訴えているのではないかと、思われるのである。ボロボロになったノラ猫を見て、あんなふうにならなくて

も自分の足で自由に生きることができたら…と語る Anorexia nervosa（神経性食欲不振症）の女性の言葉にはそれが感じられるし、Shorter（1983）も、Anorexia nervosa（神経性食欲不振症）を「女性が世界に一人の女性として存在することの障害」と述べている。

また、水田（1992）は、Spignesi（1983）と似た観点から、しかしより包括的に、女性の身体について、以下のように述べている。

「女性にとって、いまや自分自身の身体は、最も困難で重大なプロブレマティックである。主体がそこに不在であるために、つまり、子を宿すが主体を宿す場とはみなされなかったがゆえに崇められてきた女性の身体、その身体をメタフォアとした物語を読むことを通してのみ認識への道をかろうじて開いてきた女性は、一方では新たな深層とされ、他方では深層を空にして（子宮を取り除いて）、女性の身体をみずからも消費しうる商品とされながら、その物語のテキストは不在のままなのである」（水田、1992）。

ここには、女性の身体は崇められてきたが、一方で、女性が身体を通してあらゆるものを感知し、世界に根付いている存在であるにもかかわらず、その身体が主体性を確立できない、すなわち、「主体としての身体」を生きることができない事態が生じていると述べている。女性の身体が崇められてきたこと背景として、水田（1992）は、女性の身体の子を産むことができるという点を指摘しているが、まさにこれこそが、Anorexia nervosa（神経性食欲不振症）の女性たちが拒否していることである。

このことから、Anorexia nervosa（神経性食欲不振症）の女性たちの試みには、崇められた身体つまり、客体としての身体—を生きることへの拒否が表されていると言え、彼女たちは、自らの身体を拒否し、ガリガリにやせ細るなかで、押し付けられた身体性を生きなければならないという現状に反旗を翻しているのかもしれない。ガリガリにやせ細ることが正しい方法ではないにせよ、彼女たちの叫びからは、何ものにも属さない、あるいは何ものからも属されない、私自身でありたいという思いがひしひしと伝わってくるように思われる。

Woodman（1980）は、「すさまじい意志の力によるダイエットは男性的な道」であり、そこには否定的なアニムスが影響を及ぼしており、「拒否された身体は女性性からの今日的な疎外」を表していると言うが、筆者は、極端なダイエットや身体をいじめようとする姿勢そのものにも、否定的なアニムスばかりでなく、彼女たちが見せる「厳しさや容赦のなさ」、「怒り」などを通して、「女性性に纏わる何か」が姿を現していることが感じられるように思う。Perera（1981）は、現代女性が失われた女性性を取り戻す過程において

は、「扱いきれないほどのエネルギーの爆発」があると述べているが、このような激怒の様相などはまさに、Anorexia nervosa（神経性食欲不振症）の女性たちが見せる「厳しさや容赦のなさ」、「怒り」に通じるものであり、従来、否定的なアニムスの仕業とされてきたものの中にも、取り戻すべき女性性の片鱗が見え隠れしているように思われる。つまり、彼女たちが排除しようとしている「女性として成熟している身体」が女性性の一側面を象徴していると同時に、その身体を傷つけ排除しようとしている主体もまた、女性性に源を発しているように感じられるのである。

しかし、たとえ彼女たちがどんなに自らの身体を傷つけ、否定したとしても、女性は身体とともに生きているのであり、女性のセクシュアリティ—産む性であることを含めて—を受け入れて生きていかなければならないのではないだろうか。Anorexia nervosa（神経性食欲不振症）という営みには、客体としての身体を生きさせられることへの拒絶が感じられ、そこには彼女たちの「厳しさや容赦のなさ」、「怒り」が噴出しており、確かにこれは、彼女たちが「主体としての身体」を生きようとするための必然的プロセスであるとすら感じられる。しかし、過激なダイエットや過食という身体を傷つけるというやり方に留まったままでいると、それは結果的に、真に主体的な身体を生きることには繋がらないであろう。女性の身体が崇められることへと繋がった妊娠や出産という営みは、決して単なる物質的世界の出来事ではないであろうし、Woodman（1980）によると、それは女性にとって「霊的経験」と呼べるものであるという。真に求められるのは、女性が「主体としての身体」と「客体としての身体」という両義性を「主体的に」生き、その両者を繋いでいくことなのであり（廣澤、2002）、身体を傷つけるというやり方以外の方法で主体としての身体を確立し、同時に、客体としての身体をも受け入れて生きていくことが大切であり、また、必然でもあると感じられる。

上述したように、Anorexia nervosa（神経性食欲不振症）の女性たちが拒否しようとしている「女性として成熟している身体」という女性性の一側面と、彼女たちがダイエットをすることでその身体を傷つける際に見せる「厳しさや容赦のなさ、怒り」といった女性性のもう一つの側面は、ともに女性性に源を発するものでありながら、なぜこのように対峙する結果となったのであろうか。Shorter（1983）は、Anorexia nervosa（神経性食欲不振症）の女性たちが、「自己意識的に自然に背く作業 opus contra naturam すなわち物質破壊による霊魂（スピリット）の実現を担ってきた」と述べているが、ここでいう「物質」が「女性として成熟している身体」という側面を意味し、「霊魂（スピリット）の実現」を図ろうとして物質破壊を

企てるのが、ダイエットなどを通して彼女たちが見せる「厳しさや容赦のなさ」、「怒り」といった側面だと言える。Shorter (1983) の言葉を参考にしつつ、仮に、この女性性の二側面を、分かりやすい言葉で名づけるならば、Anorexia nervosa (神経性食欲不振症) の女性たちが拒絶しようとする、女性として成熟している身体という側面を「身体に根付く女性性」と名づけ、Anorexia nervosa (神経性食欲不振症) の女性たちがダイエットなどを通して見せる「厳しさや容赦のなさ」、「怒り」と言った側面を「靈魂 (スピリット) に根付く女性性」と名づけることができるだろう。

本来、女性性という同じ源流を持つはずの「身体に根付く女性性」と「靈魂 (スピリット) に根付く女性性」は、Anorexia nervosa (神経性食欲不振症) という事態においては切り離され、対立しているとさえ言える。このことをさらに、現代女性のイニシエーションと関連させて考えると、父権制の時代の到来とともに、「身体に根付く女性性」と「靈魂 (スピリット) に根付く女性性」は引き離され、地下に押し込められた「靈魂に根付く女性性」がこのような形で復権を叫び求め、身体を傷つけるというやり方で、自らの存在権利を主張しているのがAnorexia nervosa (神経性食欲不振症) という症状であると考えることができるのではないだろうか。このように考えていくと、Anorexia nervosa (神経性食欲不振症) の治療過程には、二つに引き離された女性性の二側面が再び結びついていく過程が託されていると考えることもでき、これが現代女性に課せられたイニシエーションであるという捉え方も可能であろう。

引き離された女性性の二側面—「身体に根付く女性性」と「靈魂 (スピリット) に根付く女性性」—はどのような形で再び出会い、結びついていくのだろうか。このことは、Anorexia nervosa (神経性食欲不振症) の治療プロセスを明らかにする際に重要であると同時に、「父の娘」と呼ばれる現代女性に課せられたイニシエーションプロセスについて考える際にも一助となるであろう。しかし、筆者にとって、現段階においてこのプロセスを明確に描き、その意味を把握することは非常に難しく、まだ不透明な点が多くある。したがって、次節では、二つに引き離されたものが再び出会うというプロセスを持つ、一つの神話を取り上げて、その神話の流れを追うことで、「身体に根付く女性性」と「靈魂 (スピリット) に根付く女性性」が再び結びつく様相についてヒントを得て、Anorexia nervosa (神経性食欲不振症) の治療過程及び、現代女性のイニシエーションについて考える際の、今後の展望とした。

5. ギリシャ神話<デーメーテルとペルセポネー>を用いて

ギリシャ神話「デーメーテルとペルセポネー」は、母と娘の物語であり、母娘関係について考える際に多くの臨床心理学者がこれを援用し、独自の解釈を試みている (橋本, 2000, 高石, 1997, など)。しかしここでは、先に述べたように、二つに引き離された女性性の二側面が再び出会う可能性を探るという目的に添ってこの神話を用い、論を展開したい。

まず、デーメーテルとペルセポネーの神話の概略を示すと、以下のようになる。

～大母神デーメーテルの娘であるペルセポネーが、冥界 (地下) の王ハデスに地下の国へとさらわれてしまう。デーメーテルとペルセポネーの結びつきは大変強かったため、デーメーテルは悲しみにくれて、土地を不毛にして娘を返してくれと神々に要求した。その結果、妥協策として、娘は一年の三分の一を夫ハデスのいる冥界 (地下) で、三分の二を母デーメーテルと地上で暮らすこととなった。～

筆者は、この神話に、女性性の二つの側面が引き離され再び結びつくさまを重ねてみたのであるが、具体的には、まず、デーメーテルとペルセポネーが本来結びつきが強かったという点を、女性性の二側面は元来、源を一にしていたのではないかと、いう点になぞらえている。また、冥界の王ハデスによって、ペルセポネーが地下へと連れ去られたところを、女性性の二側面が引き離されたところと重ねて見ている。そして、冥界 (地下) に連れ去られたペルセポネーを、Anorexia nervosa (神経性食欲不振症) の女性たちが見せる「厳しく容赦のないところや怒り」に込められている「靈魂 (スピリット) に根付く女性性」と捉え、土地を不毛にして悲しみにくれているデーメーテルを「身体に根付く女性性」と捉えた。このように考えてみると、強い結びつきを有していたデーメーテルとペルセポネーが強引に引き離されるという事件の後に、ペルセポネーが一年の三分の一を夫ハデスのいる冥界 (地下) で、三分の二を母デーメーテルと地上で暮らすことになったという結末からは、「靈魂 (スピリット) に根付く女性性」が地下と地上を周期的に巡っていると考えられ、「靈魂 (スピリット) に根付く女性性」と「身体に根付く女性性」は地上で結びつき、一定期間が過ぎると離れ、また結びつき…を繰り返すと言える。

このことから、次のようなことが推測される。つまり、本来源を一にしていた女性性の二側面は、一旦切り離されたことによって、より流動的な関係性を築くようになったと言え、混沌とした一から二という分化が生じ、しかもその二側面は結合と分離を延々と繰り返す。

返していくと考えられるということである。この流動的な関係性、すなわち、「靈魂（スピリット）に根付く女性性」と「身体に根付く女性性」は分離したままでも結合したままでもなく、その両方を行ったり来たりするというあり方が、Anorexia nervosa（神経性食欲不振症）の女性及び「父の娘」と呼ばれる現代女性に対して、選択しうる一つの道をイメージとして提示してくれているのではないだろうか。

また、Woodman (1980) は、Anorexia nervosa（神経性食欲不振症）の女性たちについて、「彼女らはそれぞれ肉体的なやせが、何か精神的な太りを導きうると信じている。彼女らが気づいていない点は、彼女らの身体の中で体現されることを望む精神があるということ、そしてその精神と関係をもつことで、彼女ら自身の女性としての存在を自覚することができるという点である。彼女らとその精神に身を任せることによるのみ、彼女らの身体は全体性をもたらす」と述べ、さらに、「女性にとって純粋に精神的な経験は、熱情とともに彼女の身体を貫かねばならない」とも表現している。「精神」は、英語のSpirit（スピリット）の訳であるので、Woodman (1980) の言う「精神」を、先の「靈魂（スピリット）」とほぼ同義と捉え、これを「靈魂（スピリット）」に置き換えて考えてみると、「靈魂（スピリット）に根付く女性性」と「身体に根付く女性性」が付則不離の関係であり、Anorexia nervosa（神経性食欲不振症）の女性たちが顕現しようとした「靈魂（スピリット）に根付く女性性」とは身体を通してこそ具現化されると考えることができ、「靈魂（スピリット）に根付く女性性」と「身体に根付く女性性」が再び出会い結びつくこと（神話で言うと、ペルセポネーが母デーメーテルと地上で暮らす時期）の重要性が示唆されていると言える。しかし一方で、先に述べたような両者の流動的な関係性を考慮すると、両者が離れている時期（神話で言うと、ペルセポネーが夫ハデスと冥界で暮らしている時期）もまた必要であることが示唆され、そのことにどのような意味が託されているのかについては、今後検討していく必要がある。

またさらに、「靈魂（スピリット）に根付く女性性」が周期的に巡回することの意味についても考察すると、周期的に巡回し、結びついては離れて、離れては結びつくというイメージからは、関係の永続性が感じられ、特に、デーメーテルとペルセポネーが母と娘であることを考慮すると、この神話になぞらえられるエレウシスの秘儀にも見られるように、母と娘は死と再生を司りながら、命の永続性を担っていくと言える。母と娘の関係に焦点を当てて、Jung (1941) も次のように述べている。

「どの母親も娘を、どの娘も母親を、自分の中に含んでいると言える。つまり、女性は誰でも、過去に向

かっては母の中へ、未来に向かっては娘の中へ、と自分を拡大する。この融即と混合から時間に関するあの不確かさが生まれる。つまり、女性をはじめ母として生き、後には娘として生きる。この結合を意識的に体験することによって、世代を超えていき続けるというあの感情が生まれるのである」(Jung,1941)。

Anorexia nervosa（神経性食欲不振症）の女性たちの心理療法を通して、筆者は、最後のところでは、生命と言う大きな環を担う存在としてのおんなであることで母娘が繋がりをもっており、自分たちが大いなる生命の担い手としてのいのちをつなぐことを知り、「自然や宇宙と感応するようにならねば」（豊田, 1995）に開かれていくことが、彼女たちにとって重要であるように感じられる。しかし、しばしば、彼女たちはそのような「大いなる生命の法則」の中に自らがいるということを受け入れることができないように感じられる。それは、Anorexia nervosa（神経性食欲不振症）の女性たちが、子を産み育てるという女性の成熟性（すなわちそれは、大いなる生命の法則）を頑なに拒むことにも表れている。Woodman (1980) も、「大いなる生命の法則」と同義的な表現として「大いなる女神」という言葉を用い、「大いなる女神に従うことは、人生をあるがままに受け入れることである」と言い、Anorexia nervosa（神経性食欲不振症）の女性たちがこれに従うことができないことに言及している。ここでいう「大いなる生命の法則」や「大いなる女神」とは、自然のリズムを意味しており、そこには、生きることそのものに纏わる、悦びや哀しみ、そして厳しさや苦悩がある。つまりそこでは、万事は流転し、四季は移り変わり、生あるものは死に、また新たな生が芽生え、その生と死のサイクルが永遠に続くのである。このような「常に変化し続ける生」を主体的に生きること、すなわち、大いなる生命の流れの一端に過ぎない、しかし、尊い個としての人生を主体的に生きていることが、Anorexia nervosa（神経性食欲不振症）の女性たちを始め、「父の娘」と呼ばれる現代女性に求められていると考えるのではないだろうか。

このように、デーメーテルとペルセポネーの神話から、Anorexia nervosa（神経性食欲不振症）の治癒過程及び現代女性のイニシエーションについて考えるための、いくつかの重要な視点が得られた。一つ目は、「靈魂（スピリット）に根付く女性性」と「身体に根付く女性性」が互いに流動的な関係性を築くということであり、両者は分離と結合を繰り返しているということである。ここで重要なことは、分離、あるいは結合のどちらかだけにウェイトが置かれるのではなく、その両方を流動的に生きるという点である。二つ目は、「靈魂（スピリット）に根付く女性性」が身体を通してこそ具現化されるという性質を持っている点であ

る。Anorexia nervosa（神経性食欲不振症）の女性たちが拒絶し傷つける身体こそが、彼女たちが主張する「靈魂（スピリット）に根づく女性性」を生かすのであり、彼女たちが厭う身体からこそ癒しがもたらされるのだ、とすることができるだろう。一方、「靈魂（スピリット）に根づく女性性」と「身体に根づく女性性」が一如であった際の「一にして全という混沌」と、一旦分離した後の「結合としての一」は、おそらく様相が異なっているように思われ、その違いについては今後さらに検討する必要があるだろう（但し、結合としての一も、また分離するのであるが）。最後に、神話の中の、巡回するというイメージから、Anorexia nervosa（神経性食欲不振症）の女性や「父の娘」と呼ばれる現代女性にとっては、自然のリズムにのっとり、命の永劫性を担いつつ、個としての尊い生を主体的に生きていくという、言わば「主体的受容性」を引き受けていくことが必要不可欠である、という点が指摘できると思われる。

これらの3つの視点は、なぜ、元来源を一にしていた女性性の二側面が二つに引き離されたのか、さらに、それらが今後どのように結びついていくのか、について明確な答えを与えてはくれないが、Anorexia nervosa（神経性食欲不振症）の治癒過程及び「父の娘」と呼ばれる現代女性のイニシエーションにおいて取り組まなければならないテーマについて、いくつかの具体的なイメージや指標を示唆してくれているように感じられる。例えば、引き離された女性性の二側面が、分離と結合を巡って流動的な関係性を保つことや、「靈魂（スピリット）に根づく女性性」が身体を通してこそ生かされるという性質を持ち、身体からこそ癒しがもたらされる可能性があること、などを心に留めておくことは、Anorexia nervosa（神経性食欲不振症）を始めとしてその背景に現代女性のイニシエーションが関与していると思われる事例に携わる際に、その事例を理解するための一助となる可能性があるだろう。

6. 終わりに

本論において述べてきたことは、Anorexia nervosa（神経性食欲不振症）の女性やAnorexia nervosa（神経性食欲不振症）の娘を持つ母親との心理療法をはじめとした、日々の臨床経験を通して感じたことがベースになっている。現代社会において、Anorexia nervosa（神経性食欲不振症）の女性が増えてきているという背景には、これまで述べてきたような女性性に纏わる問題が影響しているように思われ、ここには現代社会が集合的に抱えている病が反映されていると感じられる。臨床場面で感じることを言葉にする難しさを痛切に感じるが、今後もこの問題について慎重に考察をすすめていきたいと思う。

<文献>

- 浅田千恵（1996）『女はなぜやせようとするのか—摂食障害とジェンダー—』勁草書房。
- Bruch,H.（1978）The Golden Cage The Enigma of Anorexia Nervosa. Cambridge, Massachusetts, Harvard University Press.（岡部祥平・溝口純二訳。（1979）『ゴールデンケージ—思春期やせ症の謎—』星和書店。）
- Emett,S.W.（1985）Theory and Treatment of Anorexia Nervosa and Bulimia Biomedical Sociocultural and Psychological Perspective. New York: Brunner/Mazel.（篠木満、根岸鋼訳。（1986）『神経性食思不振症と過食症』星和書店。）
- 橋本やよい（2000）『母親の心理療法—母と水子の物語—』日本評論社。
- 廣澤愛子（2002）「『現代女性の自己実現』と『女性性による癒し』に関する一考察—主体的受容性を巡って—」『大阪大学教育学年報』vol.7 pp181-192.
- Jung,C.G.（1951）EINFUHRUNG IN DAS WESSEN DER MYTHOLOG—DAS GOTTLICHE KIND/DAS GOTTLICHE MADCHEN.（杉浦忠夫訳。（1975）『神話学入門』昌文全書。）
- Jung,C.G., M.-L. von Franz., Joseph L.Henderson, Jolande Jacobi, Aniela Jaffe.（1964）MAN AND HIS SYMBOLS.（河合隼雄監訳。（1975）『人間と象徴—無意識の世界—上・下』河出書房新社。）
- Jung,C.G.（1936）Der Begriff des kollektivenUnbewuBten.（林道義訳。（1999）『集合的無意識の概念』『元型論』紀伊国屋書房。）
- Jung,C.G.（1941）Zur psychologischen Aspekt der Korefigur.（林道義訳。（1999）『母娘元型—デメテル=コレー神話』『元型論』紀伊国屋書房。）
- 河合隼雄（2000）『紫マンダラー—源氏物語の構図—』小学館。
- 水田宗子（1992）「女性の自己語りと物語」『批評空間』4 Pp64-79.
- 中村このゆ（1997）『神経性食欲不振症の心理臨床—病態、治療、分析心理学的見解の再検討—』風間書房。
- Orbach,S.（1978）,（1990）Fat is a Feminist Issue. Berkley.（落合恵子訳。（1994）『ダイエットの本はもういらぬ』飛鳥新社。）
- Perera,S.B.（1981）Descent to the Goddess: A Way of Initiation for Woman. Inner City Books.（山中康裕監修 杉岡津岐子 小阪和子 谷口節子訳。（1998）『神話にみる女性のイニシエーション』創元社。）
- 斎藤清二（2000）「元型的観点から見た摂食障害」『心理臨床学研究』vol.18（1）,pp13-24.
- Shorter,B.（1983）The Concealed Body Language of Anorexia Nervosa. Beebe,J.ed. The Proceeding of

the 8th International Congress for Analytical Psychology. Verlag Adolf Bonz. (小川捷之監訳 (1987)『父親—ユング心理学の視点から—』紀伊国屋書店.)

下坂幸三 (1983) 「アノレキシア・ネルヴォーザ覚書」下坂幸三編『食の病理と治療』金剛出版.)

下坂幸三 (1988) 『アノレキシア・ネルヴォーザ論考』金剛出版.

Spignesi,A. (1983) Starving Women A Psychology of Anorexia Nervosa. Dallas Texas: Spring Publications Inc..

高石浩一 (1997) 『母を支える娘たち』日本評論社.

田多香代子 (1992) 「神経性食思不振症者の治療例—父性性からの開放—」『心理臨床学研究』vol.10 (2) ,pp52-62.

豊田園子 (1995) 「女性的なスピリチュアリティと心理療法—ユング派の観点から—」『精神療法』vol.21 (3) pp255-261.

Woodman,M. (1980) The Owl Was a Bakers Daughter Obesity, Anorexia Nervosa , and the Repressed Feminine. Inner City Books. (桑原知子・山口素子訳. (1987) 『女性性の再発見—肥満とやせ症を通して—』創元社.